

氏名	おお 谷 しゅん た 大 谷 俊 太
学位(専攻分野)	博 士 (文 学)
学位記番号	論 文 博 第 450 号
学位授与の日付	平 成 15 年 3 月 24 日
学位授与の要件	学 位 規 則 第 4 条 第 2 項 該 当
学位論文題目	近世堂上歌論の研究

論文調査委員 (主査) 教授 日野龍夫 教授 木田章義 助教授 大谷雅夫

論 文 内 容 の 要 旨

本論文は、和歌史における「近世」の成立とその特質について、室町時代から江戸時代前期にかけての歌論（歌道聞書）・和歌作品等を資料として論じたものである。当代において、和歌文学の担い手は、前代に引き続き依然堂上家を中心であり、その権威は健在で、彼らは当代文化をその中心で支えていた。従来の文学史研究においては旧態依然たる作品を再生産し続けているのみで新味のないものとして閑却視されがちであった当代の和歌を、当代文化との関わりも含めて、文学史上に正確に位置づけることを目指したものである。

第一章「近世堂上和歌序説」は本論文の総論に当たるものである。先ず「近世」（彼らにとっての「近代」）とは室町時代後期の三玉集の時代に遡ることを確認する。その上で、「近代（当代）」の和歌の特質を、以前の和歌が持っていた余情を失い、より緻密なものになった点であると考え、中世を経過するにつれて趣向が詠み尽くされてくる中で、新趣向を求めるところからもたらされたといういわば和歌史の必然に、また和歌に近似する文芸としてある連歌の影響とに、その因由を求めた。さらに、曖昧さを排除し道理を通す点に、当代の他の事象と同じく合理的精神の洗礼が見え、それが宋学の浸透に拠るものであることを示唆する。また、近世文学に見られる趣向重視の姿勢がやはり和歌においても強まることを指摘した。あわせて、近世前期を通じて、原則として和歌は堂上の営為であることを論じた。

第二章「近世堂上和歌の基調」においては、室町時代後半から江戸時代前半にかけての、思想・美意識・道徳といった精神性と和歌世界との関わりを論じ、当代和歌の持つ基層の特質を考察した。

「一 謙退の心」では、中世以来、歌道は同時に人の道でもあり、人間修養の問題でもあったが、その表れである「謙退の心」を、当代の和歌の特質として指摘し、それが近世期に入って窮まり、歌人の和歌に対する態度にとどまらず、和歌の表現をも規制し、終には行き詰まる様を、主に当代歌論を検討することで論じた。

「二 面白がらすは面白からず」は、「面白がらすは面白からず」という美意識を藤原定家の「見渡せば」の和歌の解釈の変容の内などに捉え、また、和歌に限らず能や茶の湯・立花・連歌といった当代の諸芸能を通じて見られるものであることを指摘する。そして、面白がらせてはいけない理由として、すぐにすりとした「正風体」が宣揚される和歌史的状況と巧み飾ることの非を説く道徳観を考え、その背後に宋学の浸透を想定した。

第三章「道理と余情」では、和歌が本来持っていたにもかかわらず失いがちの余情をいかに保ちつつ、いかに一首の中に道理（理わり）を緻密に明らかにするかという「近世」の和歌の直面する課題について、その種々相において検討を加えた。

「一 幽斎歌論の位置」では、これまで中世和歌の最後尾としての位置づけしか与えられていなかった細川幽斎の歌論を、作歌法に則して検討することにより、後の元禄堂上歌論につながるものであることを指摘し、近世和歌の劈頭に位置づけた。

「二 新情の解釈」は、中世から近世にかけて和歌の入門書として尊重された『詠歌大概』、その冒頭の一句「情以新為先」の解釈をめぐる諸問題を、その注釈書を検討することにより考察した。この「新情」をめぐる議論こそが即ち当代歌論の中心議題でもあるが、新趣向を求める技法論から詠歌に際しての心的態度・精神修養の問題へと変化した、その解釈の変遷に宋学の新注の影響を指摘した。

「三 近世堂上和歌と連歌」では、「当代の歌はみな連歌なり」（細川幽齋『耳底記』）という認識の意味を、当時の和歌の添削資料・歌合判詞などと突き合わせ、考察した。和歌との相違点である「言ひ詰め」た言い回しとは、表現上詞が詰め込まれていることを指すのではなく、ことわり（理・理屈・意味）をはっきりと露わに言い切ることを意味するものであることを指摘し、言い詰めない言い回しは、余情ある幽玄な言い回しであることに言い及ぶ。当代の和歌が細かくなり余情を失ったのは、連歌的表現の浸食を受けたためでもあることを右の添削資料等の検討を通して確認し、一方で、和歌は連歌と同時に存在していたが故に、連歌への対応として、たけたかく、幽玄で、余情あるものとして、連歌と詠み分けられねばならないものであったことに言及する。

「四 テニハ伝受と余情」は、古今伝受の最初の伝受であるテニハ伝受は、歌の末の「つつ」「かな」についての秘伝である実態を明らかにし、その成立の時期と理由を考察した。それは後水尾院から霊元院にかけてのころの成立で、余情を失いがちであった当代の和歌の現状に鑑み、「つつ」「かな」というそれ自体が余情を表すテニハを用いて、安易に和歌に余情をもたせようとすることを諷める意図に発するものであったことを指摘した。

「付論」は、後水尾院や烏丸光広が和歌を解釈するに際し、「じゃほどに」と補って解釈していた事実から、それを余情の言語化と考え、そこに言語化出来ないものをも言語化して明らかにしようとする近世的特質を窺ったもの。

第四章「近世堂上和歌の諸相」では、中世以来の和歌を特徴づける秘伝・伝受の問題、禁制詞の問題、また、和歌の実作の検討例として富士山の和歌を採り上げ、それぞれ具体的に、その伝統の確認と、当代性を論じた。

「一 秘することの意味」では、『百人一首』の家持詠の「鵲の橋」についての秘説が、歌意の解釈に関わるよりは、実は詠歌のひけつを伝えんとしたものであることを以て、秘説・秘伝なるものが、詠歌行為に直接関わる実際の効用をもつものであったことを論じた。「二 「こてんの詞」覚書」では、室町時代から江戸期にかけての歌書の中に、「制詞」の一種として「こてんの詞」と呼ばれる術語が散見するが、その用例を諸書から集め検討し、「こてん」とは「小点」であること、ただし、時には「古点」と理解されもし、その意味も必ずしも一定ではないこと、しかしながら、およそ、『詠歌一体』所収の「先達加難詞」等を核として、必ず禁止されるのではなく、場合により用捨される詞であることを見出した。特に細川幽齋にとっては一通りでは置きにくい初五文字であり、自身の詠歌や門弟指導に当たっての実際の効用を持つものであったことを指摘した。

「三、富士詠素描」では、富士を詠んだ和歌、富士詠は、その雄大な実景の故もあって、余情を持ち得ず細かくなった当代の和歌一般に比して、やや自由な詠みぶりが見られるが、中世・近世の富士詠を見渡し、その独特の趣向二三を指摘・分析し、さらに、その新しい趣向が本意化して行く様を明らかにした。

論文審査の結果の要旨

本論文が扱う日本近世の宮廷を中心とした和歌、所謂近世堂上和歌は、同時代文学の研究の側からは、俳諧や浮世草子などの新興の文学とは違って時代に取り残された保守的営為であるとして、また和歌文学研究の側からは、旧態依然たる和歌の再生産に過ぎないものとして、長らく等閑視されてきたものであった。

しかしながら、当時において、和歌は前代に続いてなお第一芸の地位にあり、その主な担い手である堂上家の権威は健在であった。当代文化の中心にいた堂上家の手になる文学の研究は、当代文化の解明に必須のものと言わなければならない。

近年、堂上歌人や作品の個別の紹介・研究が散見されるようになり、その研究は漸く緒についた感はあるが、しかし、近世文学研究、和歌文学研究の中でも、それはなお最も立ち後れた分野である。そのような研究状況の中にあって、本論文は、近世和歌の成立と特質について、同時代の資料を用いて実証的に論じ、しかも当代の思想や他の芸能を含む諸文化全体の中に和歌を位置づける試みとして注目に値する。

このジャンルの研究の遅れは、資料整備の遅れでもある。前代に比べて、和歌人口が大幅に増加したこともあり、資料の伝存には恵まれるが、その多くが未紹介・未翻刻の状態にある。論者は、各地の図書館・文庫を博搜して当代和歌・歌論資料それぞれの諸伝本中の最善本を見出す努力を尽くしただけでなく、多くは断片的で難読のそれら詠草・聞書などの書写資料を正確に読解し、緻密に分析するための高い能力を有しており、それが本論文の実証性を支えている。

本論文は、大きく分けて二つの視点からの考察を行っている。すなわち、第二章「近世堂上和歌の基調」における、思想

・美意識・道徳といった精神性と和歌世界との関わりを論ずる方向と、第三章「道理と余情」における、余情を保ちつつ一首の中に道理（理わり）を明らかにするには如何にすべきかという、近世和歌の直面した表現法の問題を論ずる方向である。

前者については、「一 謙退の心」で、人間修養の道としての歌道の尊重する「謙退の心」が、近世期には歌人の和歌に対する心構えにとどまらず、和歌の表現をも規制し、終にはそれを行き詰まらせる枠組みとなってしまった有様を、主に当代歌論の検討によって論じている。当代和歌の本質と限界とを明示する卓論である。

「二 面白がらすは面白からず」は、「面白がらすは面白からず」という美意識が、和歌をはじめとして能・茶の湯・立花・連歌といった当代の諸芸能にも通じて見られるものであることを指摘し、そして、その美意識の背景として、当時の和歌史的状况、巧み飾ることの非を説く道徳観の存在、さらにはその背後の宋学の浸透を想定する。当代文化論としても魅力的な、学際的掘りを持ち有用な論と言えよう。

後者の「道理と余情」の視点については、第一章「近世堂上和歌序説」がその総論を示し、第三章に各論を述べる。当代の和歌は、前代の和歌の余情を失い、その反面、より緻密な表現を得たことを指摘した上で、論者は、その原因を、歌の表現の趣向が詠み尽くされてくる中で、より細かな新しい趣向が追求されなければならなかったといういわば和歌史の必然と、和歌に近似する文芸としてあった連歌の影響とに求める。さらに、当代の歌が曖昧さを排除し道理を通そうとする点には、宋学の浸透ともなって生まれた合理的精神があることをも示唆した。このように、当代和歌の特質を見出した上でそれを和歌史の流れの中に位置付け、その因由を他の文芸や思潮の中にも求めるという的確で広い視野の見取り図は、これまで学術的な位置づけがなされずに来た当分野について、初めて実証的な形でそれを示したものであり、高く評価できよう。ただし、宋学との関わりを指摘が示唆に留まっている点は飽きたらず、また「道理と余情」の問題は、この時期に限らず和歌自体が内包する問題であることを思えば、他の時代への目配りにはやや不十分な点が残されている。

第四章「近世堂上和歌の諸相」は各論である。「一 秘することの意味」は、秘説・秘伝なるものが、詠歌行為に直接関わる実際の効用をもつものであったことを論じており、第三章の四「テニハ伝受と余情」とともに、中世以来の和歌を特徴づける秘伝・伝受の当代的意義に言い及んでいる。また、「三、富士詠素描」は、和歌の実作の検討例として富士山の和歌を採り上げ、その新しい趣向の本意化の問題を論じている。本論文の題目が「近世堂上歌論の研究」であり、「和歌」の研究でないのは、当該分野の研究の立ち後れにより、未だ和歌そのものを論じるための環境が整っていないための已むなき次第と理解するが、本論文の成果に基づき、今後は和歌作品自体の考察が求められる。その意味で、富士詠という限られた対象についてはあるが、実作の考察が成果を得た意義は小さくない。

以上、審査したところにより、本論文は博士（文学）の学位論文として価値あるものと認められる。平成15年2月18日、調査委員三名が論文内容とそれに関連した事柄について口頭試問を行った結果、合格と認めた。